

イタリア見て歩きの記

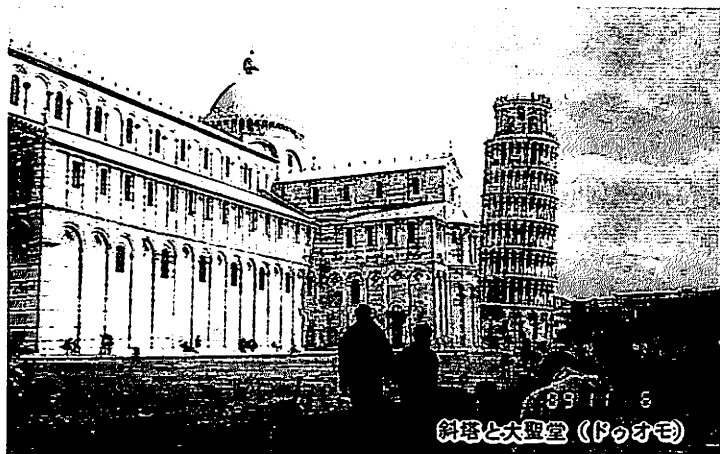


ピサの斜塔に登るの巻

イタリア素描

イタリア半島はおなじみの長靴の形をしていて、シチリア島を爪先でちよいと蹴飛ばし、頭にはスイス・アルプスの山々をいただいている。国土面積は約三十三万平方キロで日本のほぼ八割、人口は約五千七百万人でほぼ半分、緯度は日本の東北地方、北海道に相当するが、気候はずっと温暖で明るく、国民性も明らかで屈託がない。

戦前、例の日独伊防共協定を結んだ苦い思い出があるが、戦中のねばり強い反ファシズム・レジスタンスとか、戦後一年にして君主制の廃止を国民投票で決めると同時に、初の女性の参政



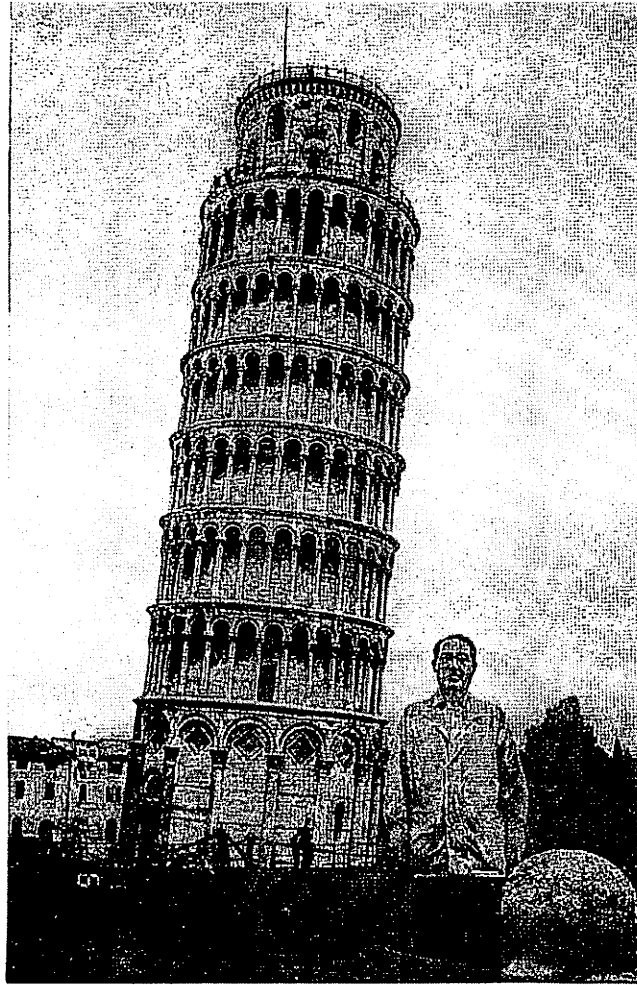
権を認めて、制憲議会の総選挙を実施し、一年半の審議を経て、自主的にイタリア共和国憲法を制定するなど、アメリカ占領下にあった日本とは異なった動きが見られた。現在、共に奇しくも金権腐敗で与党が揺す振られ、政局の不安定を招いている。

ピサの斜塔

私が四年前初めてイタリアを訪ねたのは、どうしてもピサの斜塔を見たかったからだ。以来四回も訪ねるほど、すっかりイタリアに魅せられてしまった。

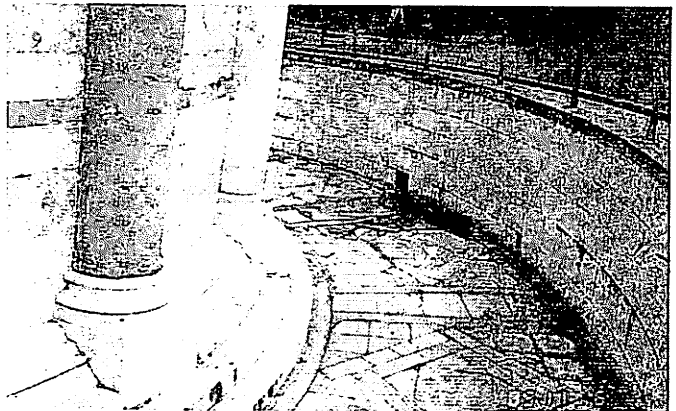
イタリアは遺跡だらけの国である。豊富に産する大理石をふんだんに使った石造建築だから、崩れることはあっても、木造のように焼失しないからであろう。見るからに古めかしいビルでも「あれはほんの三百年くらいです」と、事もなげにガイドさんはいふ。築後五百年以上も経たないと「古い」とは言われないようである。

ピサの斜塔は一一七三年に大聖堂の鐘楼として着工された。当時のピサは造船と交易とで地中海各地に植民地を持つ都市国家（共和国）として栄えて





↑ ふるえる足 (第4層から)
塔基礎部の損傷 ↓



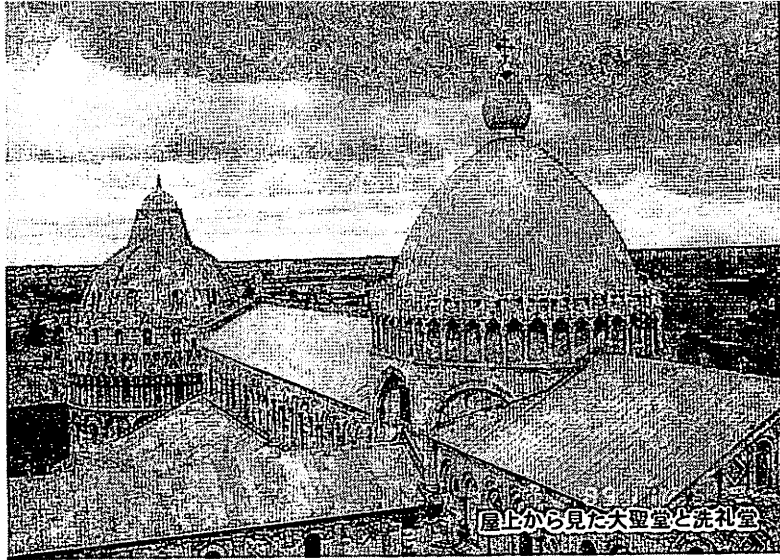
おり、その隆盛を誇示するために、相次いで大聖堂、洗礼室、鐘樓が建設された。

鐘樓の着工後十二年、三階まで建てたところで傾斜に気付き、その後、補正のため重心の位置を少しずつずらしながら建築を続けたので、大げさにいえばバナナのような形で仕上がった。

竣工は着工から実に約二百年後の一三五〇年であった。この間にピサ共和国が衰退するという変革があった。ちなみに大聖堂の建築には五十年、洗礼堂は二百五十年を要した。いかに政変があらうと、びくともしない宗教の根強さに驚くほかない。

現在の斜塔は八階建てで五八・九メ

ートル、平均五度十二分二十秒傾いているから、屋上の中心は、基礎部の中心から水平距離にして四・九二メートルもずれていることになる。その横断面は外径約十七メートル、内径約八



メートルの中空状で、四・五メートルほどの壁の中をくりぬいて、人一人やと昇れるほどの螺旋状トンネルの階段がつけてある。そのおかげで私のよ

うな好事家が、屋上めざして世界中毎年何百万人も訪れる大観光地となった。私も勇を鼓して昇ってみたが、大理石の階段が塔の傾きに合わせて擦り減っている。これまでに昇った何千万人いや何億人も人の足跡であろう。屋上の最大傾斜の部分はオーバーハング状になっていて、やや高所恐怖症の私にはとても見下ろすことができなかつた。

ピサ出身の物理学者ガリレオ・ガリレイが、物体落下の法則を実験、確立したのは有名な話である。また、大聖堂内の説教台近くの天井に吊り下げられているランプは、やはりガリレオが振り子の原理を発見したというので、「ガリレオのランプ」として知られている。

ピサの斜塔は今でも毎年一ミリ強の傾斜が進んでいて、やがて倒壊のおそれさえ出てきた。それがまた観光客を呼ぶわけでもあるが、本当に倒壊しては元も子も無くなる。遂にイタリア政

府は、観光収入に頼るピサ市をなだめて、塔の斜度を現状のまま固定させる大修理に踏み切り、工法を国際コンペにより募集した。その採用候補となつた我が国の軟弱地盤固定の権威、中西渉博士との縁で私も同行できた。一九八九年十一月のことであった。その翌年一月、観光客の塔への昇降はもちろん接近さえも禁止された。幸というべきか、不幸というべきか。

なお、中西工法が採用されたかどうかは、いまだに分からない。

(ながさき あきら)

|| 県民教育研究所理事長)

